

第 1 回有害性評価小検討会（平成 23 年 10 月 18 日）の検討結果概要

（国が実施したがん原性試験結果の評価関係）

1 ラット、マウスを用いたジフェニルアミンのがん原性試験（経口投与（混餌））

○ラットの雌雄及びマウスの雄でジフェニルアミンによるがん原性が示された。

○技術指針の作成の可否に関連し、

①がん原性の閾値の有無の判断に当たって、変異原性に関する情報が不十分である。

②がん原性の閾値があるとすると、腫瘍の発生が増加している用量が許容濃度に比較して高いレベルにある。

等の意見があり、国の変異原性試験結果だけでなく、他の変異原性試験の結果も含めて検討することとした。

<がん原性試験結果報告書の抜粋>

ラットでは、雄では脾臓の血管系腫瘍の発生の増加傾向、並びに脾臓と皮下組織を含む全臓器の血管系腫瘍の発生増加、雌では子宮に腺癌の発生の増加傾向が認められた。これらの結果から、ジフェニルアミンのラットに対するがん原性が示された。

マウスでは、雄では脾臓、並びに脾臓及び肝臓等を含む全臓器に血管系腫瘍の発生増加が認められ、ジフェニルアミンの雄マウスに対するがん原性が示された。雌マウスでは腫瘍の発生増加は認められず、がん原性は示されなかった。

2 ラット、マウスを用いた 2-アミノエタノールのがん原性試験（経口投与（混水））

○ラット、マウスとも 2-アミノエタノールによるがん原性は認められなかった。

3 ラット、マウスを用いたアクリル酸のがん原性試験（吸入ばく露）

○ラット、マウスともアクリル酸によるがん原性は認められなかった。